

〈文化〉対〈文明〉

——第一次世界大戦における独仏知識人の言説戦争——

児島 由理

現在、「文化」という日本語は、「文明」とほぼ同義に使われたり、人間の生活習慣一般を指したり、様々な意味で用いられる。その一つの用例として、「文化」という語には「文明」と区別して用いられる場合があり、その背景にはドイツ語の Kultur（文化）の概念の影響があると思われる。

政治の近代化と国民国家としての統一が遅れ、ナポレオン戦争以降、普仏戦争、第一次世界大戦と、何度も西欧諸国と戦ったドイツでは、とりわけ一八八〇年代以降、西欧の〈文明〉と対立させて、ドイツの〈文化〉の独自性や優越性を主張する動きが現れた。しかし、それが極めて排外主義的な言説として展開されたのは、一九一四年の第一次世界大戦勃発が契機である。一九一四年八月以降、〈文化〉を旗印に、多くの知識人がドイツの立場を擁護した。両国の知識人たちは、〈文化〉或いは〈文明〉を旗印に、自国の戦争遂行を正当化し、相手を非難した。こうして、独仏の知識人の間で、言論によ

る戦争も行われた。

当時のドイツの知識人の〈文化〉と〈文明〉についての考え方にはある一定の傾向がある。〈文化〉は「内面的」なものであり、「個性」の尊重と結びつき、「精神」、「魂」、「道徳」などを包括するものであるのに対し、〈文明〉は「普遍的」で「外面的」なものであり、「商工業」、「科学技術」、「礼節」などを含むものだという考え方である。そして、多くの知識人が、〈文化〉は〈文明〉より高度な価値を有すると考えていた。こうして、第一次世界大戦は、〈文化〉を担うドイツと、〈文明〉を掲げる西欧の戦いであると解釈され、〈文化〉は〈文明〉より優れていると論じること、大戦におけるドイツの立場を正当化する言説が構成されることになる。大戦の勃発以降、多くの知識人が講演を行ったり、公開書簡を発表したり、共同で声明を出したりした。更には、そうした演説を集めて『ドイツの戦争とドイツの精神』、『苦難の時代におけるドイツ講

演集』といった講演集も数多く出版された。

本稿では、第一次大戦期の独仏の知識人の間で行われた、「文化」と「文明」の対立をめぐる論争のいくつかの様相を考察し、独仏の知識人における文化的自己理解の展開の歴史における一つの局面を考えたい。まず最初に、ドイツの戦争遂行を正当化する声明「文化世界に告ぐ」を取り上げ(1)、次に、独仏の知識人の言説による戦争において戦線を分けることになった「文化」と「文明」についての考え方の違いを整理し(2)、最後に当時の論争の焦点をなした「文化」と軍国主義の関連について何人かの代表的な知識人の意見を見ることにしたい(3)。

1 知識人の声明「文化世界に告ぐ」

一九一四年八月、第一次世界大戦が勃発すると、開戦直後からドイツと敵対する西欧諸国の知識人やジャーナリストは、ドイツの戦争遂行を非難した。ドイツはベルギーの中立を侵犯し残忍な戦争遂行をしている、特にルーヴァンの町を破壊したというものであるが、更に、ドイツが国際法を無視しており、そしてこれら全ての原因がドイツの軍国主義にあるという批判である。

これに対し、一九一四年十月四日、当時のドイツの代表的な学者や芸術家九十三人は「文化世界に告ぐ」⁽¹⁾と題する声明

を発表した。この声明の目的は、「ドイツの科学・芸術の代表者として、全文化世界を前に、嘘と中傷に対して抗議する」ことにあった。ここで知識人たちは、「文化」の理想を掲げてドイツの立場を擁護しようとしたのである。

この声明が発表されるきっかけとなったのは、一九一四年九月九日の『ベルリン日刊紙』(Berliner Tageblatt)に掲載された「イギリスの嘘の効果」と題するアンカ・マンの論説である。その記事では、次のような主張がなされていた。イギリスの流布した「嘘の網」が敵国に広まっており、中立国にまでそのような見方が浸透している。そのためにドイツは「野蛮な国」であるとされ、勤勉で規律のある国ではあるかもしれないが、洗練・礼節を欠いた国だと見なされている。このイギリスで作られたイメージを、世界中が信じている。つまり、ドイツと言えは「鉄兜を被ったプロイセン兵の軍国主義」を思い浮かべる風潮がある。しかし、ドイツ民族は「文化」や「ドイツ魂」(deutsche Seele)のために戦っているのである、というのがマンの主張であった。これを読んだ実業家のエーリッヒ・ブッフバルトは自然主義の作家ヘルマン・ズーダーマンに、全世界に向けて、主要な芸術家や学者による声明を公表すべきだという書簡を送った。そこでズーダーマンや、文学者ルートヴィヒ・フルダ、ゲオルク・ライケなどが中心となり、声明「文化世界に告ぐ」が起草されることになった。⁽²⁾

声明に賛同して署名した者は、圧倒的に大学教授が多く、大半はベルリン大学の教授であるが、ミュンヘンやマールブルク、イエナ、ハイデルベルク、ハンブルク、ライプツィヒ、シュトラースブルクなど、ドイツ帝国全土の主要な大学の教授の名が見える。彼らの専門分野は、哲学や神学が多数を占めているが、法学や経済学といった社会科学や、化学や物理学、医学など、自然科学の分野も少なくない。例えば、歴史神学者で、当時は国立図書館長とカイザー・ヴィルヘルム協会総裁を兼任していたアドルフ・フォン・ハルナック（一八五一—一九三〇）や、ドイツを中心とする中央ヨーロッパ（Mitteleuropa）統合案の主唱者として知られるプロテスタント神学者・政治家のフリードリヒ・ナウマン（一八六〇—一九一九）、実験心理学の創始者として有名なライプツィヒ大学教授ヴィルヘルム・ヴント（一八三二—一九二〇）、ハイデルベルク大学教授で新カント派の哲学者のヴィルヘルム・ヴィンデルバント（一八四八—一九一五）、哲学者ルードルフ・オイケン（一八四六—一九二六）、経済史・文化史学者のカール・ランプレヒト（一八五六—一九一五）など、数多くの著名な学者が署名している。一方、自然科学者としては、ベルリン大学教授の理論物理学者で、後にカイザー・ヴィルヘルム協会の総裁となるマックス・プランク（一八五八—一九四七）、X線の発見で知られるミュンヘン大学教授の実験物理学者ヴ

ィルヘルム・レントゲン（一八四五—一九二三）などの名も見える。更に、劇作家ゲルハルト・ハウプトマン（一八六一—一九四六）や作曲家リヒャルト・ヴァーグナーの息子で音楽家のジークフリート・ヴァーグナー（一八六九—一九三〇）といった芸術家も署名している。このような動きについて、著書『教養と文化』で教養市民層の自己理解を支えた「解釈パター」としての〈文化〉概念を分析しているポレンベックは、次のように解釈している。すなわち、ドイツの学界全体を網羅するような署名者の分布は、帝国主義政策と〈文化〉を結びつけ、国家間の利害の衝突で生じた戦争を〈文化〉の戦いとして捉えることによって、教養市民層の中心をなす大学教授が改めてオピニオンリーダーとしての地位を取り戻そうとした試みの現れであったというのである。⁽³⁾とはいえ、この声明を全てのドイツの知識人が支持したわけではなかった。例えば、神学者・哲学者エルンスト・トレルチ（一八六五—一九二三）は、この時期にドイツの戦争遂行を擁護する言説を多数発表しているが、自分の主張を政治的イデオロギーへと一元的に還元することを拒み、この声明には加わらなかった。声明「文化世界に告ぐ」の前半では、ドイツのベルギー侵攻への批判に対する弁明が試みられている。すなわち、ドイツが一方的にベルギーの中立を侵したというのは事実ではない。ルーヴァンの町では、住民がドイツ軍に対して悪意に満

ちた態度を取ったために、砲撃によって報復せざるを得なかった。それどころか、ルーヴァンの市庁舎など、中心部が破壊されず無傷のまま守られたのはドイツ軍のお陰であると述べられている。ルーヴァンの市庁舎は、十五世紀の半ばに建てられたフランボワイヤン様式の建物で、「石のレース」と呼ばれる多数の彫像が飾られており、芸術的価値の高い建築物であった。声明は、この大戦で芸術作品が破壊されたら、ドイツ人はそのことを嘆くだろうが、ドイツ人の「芸術への愛」が誰にも劣らないとはいっても、芸術作品の維持をドイツの敗北によって購うような事態になることを我々ドイツ人は断固として避けたかったのだと述べている。

後半では、「ドイツの軍国主義」と「ドイツ文化」の密接な関わりが問題にされている。敵は、この大戦は「ドイツの軍国主義」に対する戦いであって、「ドイツの文化」に対する戦いではないと言っているが、これは事実ではないとする。「ドイツの軍国主義がなかったら、ドイツ文化はとうの昔に根底から絶えていただろう。何百年もの間、他に類を見ないほど略奪に襲われてきた国では、文化を保護するために、文化の中から軍国主義が生まれた。ドイツ軍とドイツ民族は一体である」というのである。この点については、第三節で触れることにする。そして、「我々は文化民族 (Kulturvolk) として、この闘いを最後まで闘うだろう」と宣言し、ゲーテやベートー

ベンやカントの名を挙げて、彼らの遺産は「文化民族」であるドイツ人にとって「神聖である」と述べている。ゲーテ、ベートーベン、カントの名が挙がっているのは、署名者たちが念頭に置いていた「ドイツ文化」が、文学や音楽、哲学といった領域を中心とする、十九世紀の「教養」の理念を軸としていたことを示している。

ウンゲルン¹¹ シュテルンベルクによれば、起草者の一人であるライケは、一五一七年のマルティン・ルターの「九十五箇条の提題」を意識して、段落ごとに命題を掲げる形式で声明を発表することを提案したという。ライケの抱いていたルター像は、ローマ教皇に対しドイツ民族の利害を守った人物というものであり、「プロテスタンティズム」、つまり「反抗」(Protest) の精神をルターの中に見ていたというのである。ルターがローマ教皇に対して反抗したように、署名者たちは、自分たちも敵に対して「反抗」しようと考えていたのである。この声明の各段落は全て「……(イギリスなど連合国側が主張していること)は真実ではない」(Es ist nicht wahr, das...) という書き出しになっている。しかし、「……は真実ではない」という表現の反復は、かえってドイツ人の傲慢さと攻撃性を印象づける結果となり、⁽⁴⁾主にドイツの軍国主義をめぐって、大戦の進行と並行して言論上の戦争も進行することになった。既に「文化世界に告ぐ」に先立って、一九一四年九月四日に「ド

イツの聖職者と教授の宣言：外国のプロテスタント教徒に告ぐ」、同年十月には「ドイツの大学の声明」が発表されていたが、英仏の知識人は、これら一連のドイツの声明を挑発として受け取ったのであり、決してその主張を受け入れたものではなかった。⁽⁵⁾

ところで、この声明は、フランスでは“Appel au monde civilise”、イギリスでは“To the civilized world”という題名で翻訳された。「文化民族」も *peuple civilise*、*civilized nation* と訳されている。⁽⁶⁾ ベネトンによれば、フランスでは一九一四年まで *Kultur* には *civilisation* という訳語があてられることが多かったという。⁽⁷⁾ ドイツの知識人は、西欧に対し〈文化〉の理想を掲げてドイツの軍国主義を正当化し、ドイツの〈文化〉の特殊性を主張しようとしていたので、「文明世界」というこの英仏語訳では、前提となっていた〈文化〉対〈文明〉のアンチテーゼが正確には把握されないことになる。しかし、やが大戦が進行するにつれて、フランスの知識人は *Kultur* を *civilisation* と訳せず、*Kultur* という原語のままか、〈culture〉と引用符付きで用いるようになった。とは言え、〈文化〉と〈文明〉の対立や〈文化〉と軍国主義の関係については、ドイツの知識人とフランスの知識人との間に、大きな見解の相違があった。それでは、当時の独仏の知識人は〈文化〉や〈文明〉の概念をどのように考えていたのだろうか。次にそれを見て

いくことにしたい。

2 〈文化〉対〈文明〉の対立

当時のドイツの知識人の〈文化〉と〈文明〉をめぐる言説は、更にその内部においても大きく二つに大別することができる。つまり、両概念の融合を理想と考えるものと、両概念の対立を主張するものである。前者の例としては、アロイス・リール、カール・ヨエル、エルンスト・トレルチ、フリードリヒ・マイネッケが、後者の例としてはマックス・シェーラー、オットー・シュミット、ギビヒエンフェルス、ヒューズトン・スチュワート・チェンバレン、トーマス・マンが挙げられる。こうした〈文化〉と〈文明〉をめぐるドイツの知識人の言説は、フランスの知識人の言説と連動していた。ここでは、アンリ・ド・レニエ、ジョルジュ・フォンスグリーブ、エミール・デュルケーム、エドモン・ペリエ、ポール・ゴルティエ、ロマン・ロラン、アンリ・ベルグソンらの言説を取り上げたい。

まず、ドイツの知識人のうち、〈文化〉と〈文明〉の融合を理想と考えた人々から見ていくことにしよう。新カント主義の哲学者で「文化世界に告ぐ」の署名者でもあるベルリン大学教授のアロイス・リール（一八四四—一九二四）は「精神

文化と戦争」で、「文明」とは「我々の外面的な生活を容易にし美化する全ての手段」であり、その中には「社交上の礼儀作法、流儀、室内の調度、無電・飛行機・ツェッペリンといった、我々の力を倍増し、我々の外にある自然を我々の意志に奉仕させるような技術的發明」や、「主知主義、単なる悟性の涵養」が含まれているとしている。ここでリールが「文明」に属すものとして列挙している事項は、大きく三つの側面に分類できる。つまり、社交や礼儀作法に関わる事柄、近代的な科学技術、合理主義的・主知主義的思考の三つである。これに対し「文化」は「生の内面的内容・精神的內容から生まれる」ものであり、「単なる肉体に過ぎないものに魂を創り出す」もので、生活の営みや習慣の洗練が外面的なものにとどまるのとは異なり、それは内面的で精神的価値を持つと述べている。例えばローマ帝国には「文明」はあったが「文化」はなかったという⁽⁸⁾。リールに特徴的なのは、「文化」と「文明」は単純な対立をなすものではないと考えている点である。彼は「外面的な文明の高みが真の内面的な文化の深みと一緒になることは可能である」と述べ、「文化」と「文明」の融合は可能であるし、またそれが望ましいと考えていた。

パーゼル大学教授で哲学者のカール・ヨエル（一八六四—一九三四）は、一九一五年の『新しい世界文化』で有機体説的な「文化」観を明らかにしている。彼によると、この大戦

は「文化戦争」であると言われているが、「文化」と「文明」は相互に関連するものである。すなわち、「文化」が「組織化、自然を向上させ育てること、萌芽を開花させること、生の發展、『教養』、個人の發展、個性的なものを普遍的なものへ発展させること、個性化する秩序」であるのに対し、「文明」は「全て等しく機械化」するものであり、「単に平板なものにすぎない。フランスではドイツの「文化」を嘲笑しているが、「文化」のない「文明」は上辺だけのもので内容がない。それに対し、個人が体現する「文化」は、それが完成に達するならば、そこで初めて「文明」へと広がるものであるという。そして、このように「文明」へと發展する「文化」は諸民族の共通の財産であり、個々の民族の「特殊な情熱」、すなわちなシヨナリズムを「一方的に追求するような野蠻に対する抑制や柔和」であるとされる。こうして見ると、「文化」と「文明」は結局のところ同一であることになり、それぞれに異なる国民的な諸文化の分裂はなくなり、「文化の戦い」などというものは存在しないことになるだろうというのである。とは言え、「文化」は「有機的に成長する」ものであり、「個性的なものを典型的で普遍的なものへと發展させる」のに対し、「文明」は「人間の間の関係」すなわち社会を秩序づけるものであるという違いがあり、個人の有機的な發展である「文化」と社会的な秩序である「文明」の融合こそが理想である、とヨエ

ルは述べている。⁽⁹⁾

リールやヨエルの思想は、「文明」を「文化」の対立物として両者を全く相容れないものとして見るのではなく、「文化」と「文明」の融合を主張するものであった。しかし、二人とも、「文化」の欠けた「文明」には価値を認めておらず、「文明」はあくまで「文化」と融合してこそ意義のあるものだと考えている。

当時ベルリン大学で文化哲学・歴史哲学を講じていたエルンスト・トレルチは、リールやヨエル同様、「文化」と「文明」を対立したものと考へなかつたが、それぞれの概念については、彼らとは異なつた見解を示している。一九一五年の「ドイツ文化の精神」で、彼は「文化」と「文明」の違いを次のように説明している。⁽¹⁰⁾ すなわち、「文化」はドイツ人の歴史や精神のあり方に対応しており、「ロマン主義的」、「個人主義的」、「非合理的」で、「個人及び民族の個別な自己形成」であるという特徴をもつ。それに対して、「文明」は「アングロサクソンの」、「民主主義的」なものであり、「個人の自然の権利」や「個人による国家のコントロール」、「個人の信念の私的な性格」、「世論の政府や私人への影響」などを意味する。ここで彼は、「文明」の国家として英仏両国の名を挙げているが、「文明」の「アングロサクソンの」な性格を強調しているように、トレルチにとって、「文明」はどちらかといえばイギリスとの

関連の方が大きいものであった。それに対して彼は、フランスの「文明」について論じることはしていない。むしろ「フランス文化」は「ヨーロッパで最初の国民的統一文化」であり、「フランスの精神はイギリスの文明に属さない」⁽¹¹⁾ いうのである。このように、トレルチは、フランスを「文明」よりも「文化」と結びつけて捉えていた。

一九一六年の講演「一九一四年の理念」でも彼は、敵は「帝国主義の苛酷な詭計を、道徳的・文化的な主義——イギリスの自由や文明であれ、フランスの民主主義や進歩的な世界の開明 (Weltoffenheit) であれ——というビロードの手袋の中に隠している」と述べている。⁽¹²⁾ つまり、ここでは「文明」はイギリスに特有なものであるとされ、フランスとは「文明」ではなく「民主主義」や「世界の開明」が結びつけられているのである。後に見るように、「文化」と「文明」の対立を主張する知識人たちは、「民主主義」を「文明」の要素であると考えることが多かつたが、トレルチはこれを「文明」に属すものとは考えていない。

一九一七年の「アングロサクソン文明の二、三の特色」というトレルチの論説は、題名が示すようにイギリスの「文明」に焦点を絞って論じたものである。ここでは、イギリスの「文明」の精神は、「イギリスが島国であるという事情や貿易立国であることによる、樂觀的で着実な、支配を目指す努力」や、

「イギリス独自の宗教があるというプライドと、それと結びついて、宗教的な点で特別に自分たちは優れており、世界的使命を持っているという意識」などに現れているとされている。⁽¹³⁾ また、そこで彼は、「イギリスの精神」(English Mind)が「キリスト教的・自由主義的で説教くさい生活態度」と「断固たる、権力志向の支配者的感覚」とに分裂する過程を辿っているが、フランスの合理主義の影響を受けたイギリス啓蒙主義はここから例外であると考えている。というのも、それはルネサンス文化の継統であり、「市民文化」の一部に他ならないからであるという。⁽¹⁴⁾ トレルチにとって、フランスの合理主義は「文明」とははっきり区別されるものであり、しかもアングロサクソンので民主的な「文明」は「市民文化」とも一線を画すものであったのである。この点については、後に触れるトーマス・マンとも共通する。

「ドイツ文化の精神」の中でトレルチは、「ドイツ精神にあって、政治的・社会的制度と全く個人的な文化とを厳格に分離することは異質なことである」のに対して、「政治的・社会的文明と人格的・個人的な精神の教養 (Geistesbildung)」を分離するのは「アングロサクソンの」であると述べている。⁽¹⁵⁾ そして、イギリスは「全ての文明をイギリスの制度の支配に縛りつける」という。⁽¹⁶⁾ つまり、「文化」が「人格的」で「個人的」な「精神」に基づくのに対して、「文明」はそのような基盤の

ない「政治的・社会的」な「制度」の支配であるというのである。しかし、多くの著述家たちが「文明」を物質的で機械的だと考えていたのとは違って、トレルチは「文明」と科学技術を結びつけることはしていない。彼にとって、「文明」はあくまで「制度」を意味していた。

とはいえ、トレルチは「文化」と「文明」を全く切り離されたものとして考えていたわけではない。彼は、「文化」を考える際に重要なのは、「一民族の非常に様々で相反する生の表出を可能な限り広く捉えること」であると同時に、「一つの、或いはできる限り少数の点から、統一的な全体を深いところまで理解すること」であると述べ、その中心は「政治的・社会的な発展におかれるだろう」としている。そのような「政治的・社会的発展」から「精神は本質的に規定される」からである。⁽¹⁷⁾ 従って、「文化」は確かに「個性的」で「非政治的」なものであるが、「政治的」「社会的」な「文明」から規定される側面があるということになる。それゆえ、「文化」と「文明」を融和させ、全体を統一として考える必要があるというのがトレルチの主張であった。

ベルリン大学におけるトレルチの同僚であり、やはり「文化」に関する言説を展開したのが、歴史学者フリードリヒ・マイネッケ（一八六二—一九五四）である。彼の大戦中のテクストには、「文化」(Kultur)という語は頻出するが、「文明」

(Zivilisation) という語が現れることは極めて稀である。その数少ない例として、一九一五年の「文化、権力政治と軍国主義」が挙げられる。但し、ここで彼が言及している「文明」は一九一五年当時の西欧諸国の「文明」のことではない。彼は、ルイ十四世時代のフランスについて述べた後、「フランス同様、イギリスが早い時期に国民の政治的統一や権力を確立し、そのことがイギリスの文明の強固な基盤を作りだしていることは、我々にとっては明らかである。そして、この文明は、イギリス人に貴族主義的な安定や不変性、自信、形式的な完成を与え、促進しているのである」と述べている。そして「文明」を指して、それは「優雅な上品さと流儀」のことであるとしており、マイネッケが「文明」を宮廷における礼儀の洗練という意味で用いていたことがわかる。マイネッケは、他の知識人のように「文明」は「機械的」「科学技術的」「商業的」であるという捉え方はしていなかった。一九一四年の「政治と文化」には、「精神的・技術的・経済的文化が武器として役立つ可能性」に言及している箇所があり、マイネッケは技術・経済も「文化」の概念に含めて考えていたことが窺える。彼は、「文化」と「政治」の関係を再定義しようとする試みも行っている。「政治と文化」において彼は、「我々の文化の欠点は、我々が非常に遅れて漸く、政治的統一や権力、国民的自覚に到達したことに、少なからず起因している」と述べ

ている。当時、英仏と比較した上でドイツの「遅れ」を問題にする場合、ドイツ民族は「非政治的」なので、「文明」は持っていないが、ドイツ特有の「精神的」な「文化」を所有しているという論調が支配的であった。ところがマイネッケは、そのことをドイツ民族の「文化の欠点」として捉えている。つまり、マイネッケは〈文化〉対〈文明〉を単純にアンチテーゼとして描いたわけではなかったのである。

やはり大戦中の論説「ナシヨナリズムと国民的理想」で彼は、「西欧の文化」は「常にロマンスとゲルマンの精神の交換と相互作用へと向かっていた」と述べている。⁽²⁰⁾一九一五年の「ドイツとゲルマン民族の小国家」でも、「近代ヨーロッパの文化は、ゲルマン民族とロマンス民族の何千年もの共同体から育ったものである」と述べており、この「ゲルマン民族」と「ロマンス民族」の「精神」は「互いに大いに実りを与え、補い合ってきた」としている。⁽²¹⁾この「ドイツとゲルマン民族の小国家」という論説は、現在のドイツ人が敵国の「文化」を批判するのは敵の攻撃的な態度に起因しているとして、弁明を企てたものである。ドイツ人は元来、現在敵国となっている国の「文化」に対し敬意さえ抱いていたのであるが、大戦によって敵が「文化戦争」という言葉を用いてドイツを中傷するので、従来のような態度をとり続けることが困難になったというのである。このようにマイネッケにおいて対立の図

式をなすのは、〈文化〉対〈文明〉ではなく、「ゲルマン民族」の「文化」対「ロマンス民族」の「文化」である。ここで「文化」を持つ存在として評価されているのは「ロマンス民族」であって、イギリスの「アングロサクソン文化」については言及がない。マイネッケは、トレルチのように直接イギリスの「文明」を否定したのではないが、「文化」を問題にする際に彼は、イギリスの存在を無視していたといえよう。

マイネッケは、「文化」と「文明」を対立物として捉え、西欧の「文明」を批判した他の知識人とは一線を画していたため、「文明」については殆ど語らなかった。しかしこれは、彼が「文化」や「文明」について曖昧なイメージしか抱いていなかったということではなく、「文化」は「非政治的」であるという当時一般的になっていた見方をせず、「文化」と「政治」の関係を再定義し、それによって「文化」と「文明」の対立を超えようとしていたためであった。彼は、「非政治的」な教養市民層を「政治」と結びつけ、教養市民層が「文化」のみならず「政治」においても指導的な役割を果たすようになることを期待したのであった。「政治と文化」の中で彼は、「文化によって満たされ、高められる政治もある」と述べている。²²⁾

次に、〈文化〉と〈文明〉を融合不可能な対立として考えたドイツの知識人の例を見たい。哲学者・社会学者のマックス・

シェーラー（一八七四—一九二八）は、『戦争の精神とドイツの戦争』（一九一五年）の中の「戦争と精神文化」と題された章で、「実用性の文明」(Nutzlicheivilisation)と「精神文化」(Geisteskultur)を対置し、「経済」は前者に、「芸術」「哲学」「科学」などは後者に属するとしている。そして、「真理」や「純粹に美的なもの」「崇高なもの」を「実用的なもの」より上位に位置づけている。「実用的」なものは「国際的」で、他民族にも簡単に移植できるが、「最高の自由な精神文化」の場合はそのようなことは不可能である。「文化」は「個人的」「个性的」「国民的」なものであり、「実用的」なものにおいては重要であるとされる。「共通の人間性」を目指すものではないというのである。²³⁾そして彼は、「人は文明には、自由人としてよき奴隷として良く仕えるであろう。真の文化にはそうではない！」と述べている。²⁴⁾個別的で民族に特有な「文化」に対し、「文明」は全ての人間に共通なものであり、「個性」を認めず人間を「奴隷」にしてしまう「機械的」なものであるという主張である。

このように両概念を対立させて考える考え方は、しばしば人種主義と結びつくこともあった。オットー・シュミット²⁵⁾ギビヒェンフェルスは「〈文化〉は〈文明〉と全く混同され、まるで特徴のない、文明というくだらないお喋り (allgemeine Zivilisationsschleim)」が、全ての特別な人種的・民族的な文化

(alle besondere rassistische und völkische Kultur)、全ての眞の文化の代わりになりうると考えられていたのだ」と述べている。⁽²⁶⁾ シュミット・ギビエンフェルスは、「文明」が「何の特徴もない」のに対し、「文化」は「特別」で「人種的」「民族的」、すなわち個々の民族に特有なものであると考えている。一九一六年の『國家を創造し維持する文化要因としての戦争』では、「文化」は「貴族主義的」「国民的」であり、「文明」は「民主的」「國際的」であると特色づけている。⁽²⁶⁾

また、イギリス出身でドイツに帰化した著述家で、アーリア民族・ゲルマン民族の優越を説いたヒューストン・スチュワート・チェンバレン(一八五五—一九二七)にとつて、第一次世界大戦は、「キリスト教」「精神の陶冶」「道徳的な力」「非商業的な芸術」「理想的な生の見解」に対する、「金融、工業、商業の世界に有利な戦い」であつた。すなわち、それは「近代的で機械的な文明の、原始的で神聖で永遠に新しい、選り抜きの人種の文化に対する戦い」であるという主張である。⁽²⁷⁾ ここでははっきりと、第一次世界大戦が「文化」対「文明」の戦いであると定義されている。チェンバレンは、「文化」が「精神的」「道徳的」なものであるのに対し、「文明」は「金融、工業、商業」といったものから成り、「機械的」なものであると見なしている。そして、「選り抜き」(auslesen)や「神聖」(heilig)などの形容詞が示すように、彼は「文化」の方が上位

にあると見ていた。そして、「文化」とは、ドイツ民族のように「選り抜きの人種」に固有なものであると考えたのであつた。

「文化」と「文明」という対立について最も広範な論陣を張つたのは、おそらく作家トーマス・マン(一八七五—一九五五)であろう。大戦勃発時、マンは「ドイツ文化」を擁護するエッセーに取り組み、一九一四年の「戦争中の随想」(Gedanken im Kriege)、一九一五年の「戦争に関する随想」(Gedanken zum Kriege)、そして一九一五年から一九一八年にかけて執筆された長大な論説『非政治的人間の考察』として発表した。しかし、そこにはマン特有の「文化」、「文明」に対する理解があつた。

「戦争中の随想」で彼は「文明」と「文化」は対立物である」と明言し、次のように説明している。「文化は完結性、様式、形式、方法、趣味であり、一つの確固たる精神的な世界組織である。……文化は神託、魔術、男色、妖怪、人身御供、狂気じみた礼拝形式、宗教裁判、異端者の火刑、舞踏病、魔女裁判、毒殺の横行、多種多様な残虐行為を包括しうる。しかし文明は理性、啓蒙、馴致(Sanftigung)、教化(Sittung)、懷疑、解体である。つまり、精神である。精神は文明的で市民的である。精神は本能、情熱の断固たる敵であり、反デモニッシュ、反英雄的である。」⁽²⁸⁾「一見、「文化」の側に否定的な

事項が羅列されているようだが、彼はそれに続く箇所で、「文化」とは「より深く、暗く、熱い世界」を「神々しく、そして様式的な形をとって飼い馴らしていくこと」であるとしている。「神託、魔術、男色」以下の各事項はこのような原始的なエネルギーに溢れた「世界」から生ずる要素として、「文化」に含められている。マンは「芸術は全ての文化と同様、デモニーニッシュなもの昇華である」とも述べており、「より深く、暗く、熱い世界」とは「デモニーニッシュな」世界とも言い換えられる。そのような「デモニーニッシュな」文化は「純粹に人間的」な概念であるとマンは考えていた。⁽³⁰⁾つまり、人間は合理性だけで割り切れるものではなく、芸術の創造力の源泉となる非合理的な要素も持ち合わせてこそ人間的であると考えているのである。それに対して「文明」は「反デモニーニッシュなもの」とされ、「理性、啓蒙、馴致、教化、懷疑、解体」と結びつけられている。マンが「精神」と呼ぶこうしたものは、人間本来の創造力の根源にある非合理的なものを抑圧するものであるという。

マンにおいても、「文明」の科学技術的・物質主義的な側面についての記述はなく、トレルチやマイネッケと共通するように見えるが、その理由は彼らの場合とは異なっている。それは、マンが「文明」を、単に外面的・物質的・機械的なものだけを意味するのではなく、「精神」(Geist)と結び付い

たものであると捉えていたからである。『非政治的人間の考察』の中でマンは、「文化」が精神的で「文明」が物質的であるという単純に割り切った解釈は「文明に対してあまりに敬意を表することが少ない」としており、この対立図式を自分は「不十分だと考えた、いや間違っていると考えた」と述べている。彼の解釈によれば、「文明」は「精神そのもの」、つまり「理性、教化、懷疑、啓蒙、そして最後に解体という意味での精神」であった。⁽³¹⁾すなわち、分析して解明しようとする啓蒙主義的な合理主義の「精神」である。ここで「解体」という表現はわかりにくいのが、マンは作曲家のヨルジュ・ビゼーの書簡の一節を借用して説明を加えている。つまり、ビゼーは「避けがたく仮借のない進歩が芸術を圧殺してしまう」と書いているが、これは、「文明」の作用がどのようなものであるかを示しているというのである。このようにマンは「文明」とは不可避的な進歩であり、芸術を殺すような要素を持つていると考えていた。それに対して、マンは、「文化」は「芸術的に組織し、構築し、生を維持し、生を浄化する原理」であると考えている。そして、ビゼーの言葉を借りるならば、彼が「迷信にどっぷりつかつた社会はまた、芸術の偉大な庇護者でもあった」といえるというのである。

ともあれ、「文明」とは「精神」であるという捉え方は、当時のドイツの知識人の間では独特なものであった。大半の知

識人は「精神」とは「ドイツ的 (deutsch)」という形容詞を冠して表現されるものであり、「ドイツ精神」と「文化」の間の密接な関わりを指摘し、「文明」は「外面的」で「精神」がないという、まさにマンが「間違っている」と考えたような図式を描いていたからである。しかし、マン自身の「精神」という語の使い方も、必ずしも一定していない。つまり、上述のように「文明」は「精神」であると述べている箇所もあれば、「ドイツ文化」を「精神」に比定している箇所もある。例えば「戦争中の随想」では「精神は本能、情熱の断固たる敵」すなわち「文化の敵」であると述べている一方で、「文化」は「いわば世界を精神的な意味で組織したものである」と述べている。また、『非政治的人間の考察』では、「精神と政治の差異は、文化と文明、魂と社会、自由と選挙権、芸術と文学 (Literatur) の差異を包括している」と述べている。そして「ドイツ精神」は「文化であり、魂であり、自由であり、芸術であって、文明、社会、選挙権、文学ではない」というのである。⁽³²⁾

尚、ここで「文学」が「芸術」とは別のものであるという考え方は奇異な印象を受けるが、マンの考えでは、真に「ドイツ的」であるのは、ゾラを模範とするような政治的・社会参加的志向を持つ「文学」(Literatur)ではなく、非政治的で自己完結的な「文芸」(Dichtung)なのであった。「文学的」と

いう点に関しては、『非政治的人間の考察』では次のように検討が加えられている。先述の「精神と政治の差異」、すなわち「文化」と「文明」を区別したところでマンは、「文学」を「文明」の項目として分類しているが、「非文学的な国」と題された章では、「文明と文学は同一物」であると述べ、「文明」は「明確に文学と結びつき、言葉ではっきりと表現された精神と結びついている」としている。それに対して、「文化」は、「文芸」や「音楽」と結びつくが、これらは「文明」の立場から見ると、「あまりにも間接的で、微温的で、無責任な」、つまり「信賴のおけない役割を演じている」として、距離を置いた口調で語っている。⁽³³⁾これはマン特有の逆説的な表現で、マンが「文化」を否定的に捉えていたということではない。「デモーニッシュ」なものは、「言葉ではっきりと表現され」えないものであるからこそ、「文化」に属するというのである。

このように、トーマス・マンは、「ドイツ精神」は「文化」に属しているとしているが、他方では「文明」を「精神」と関連づけている場合もある。マンによれば、「文明」とは「市民的に政治化され、文学化された精神の伝播」であり、「精神」による、先住者のいる大地を植民地化すること⁽³⁴⁾である。すなわち、「精神」という語自体は、「文化」についても「文明」についても使用されうるものであり、その「精神」のあり方が「文化」的であるか、「文明」的であるかが問題なのだとい

うのである。「ドイツ精神」というように形容詞 *deutsch* を付したり、「理性、教化、懐疑、啓蒙、……解体」という意味での「精神」というように限定を加えたりしているのは、それによって「精神」の二つの異なるあり方を区別して表現しようとした意図の現れであったと考えられる。

それでは、「文明」について、その「精神」が問題となるとき「精神」とはどのようなものであろうか。前述の引用に「政治化され、文学化された精神」とあるように、この「精神」は「政治的」であり、「文学的」であることを特徴としている。「選挙権」や「社会」といった表現も、「精神」が「政治的」なものであるという点に集約できる。『非政治的人間の考察』でマンは、「ローマ的西欧」の人間が知っている「精神」は「市民革命の政治的精神でしかない」と明言している。⁽³⁵⁾これは、「文明」は「物質的」にすぎないと考える多くのドイツの知識人よりも、後に見るような「文明」の「精神」はフランス革命に遡ると考えたベルグソンのようなフランスの知識人たちと通底する考え方である。「戦争中の随想」でマンは、「政治は理性、民主主義、文明に関わることであり、道徳は文化や魂に関わることであり」と述べており、⁽³⁶⁾「理性」、「教化」、「懐疑」、「啓蒙」、「解体」といった表現も、それは全て「政治的」なものであるという枠の中で理解されている。また、「精神による……植民地化」という表現は、「文化」は多様性を認

めるものであるのに対し、「文明」は一元化を志向して、普遍性を追求するものであるという見解を示すものである。

ところで、「文明」を「ローマ的西欧」のものであるとしているように、マンにとっての「文明」世界とはフランスであった。『非政治的人間の考察』では、随所でドイツの「魂」とフランスの「精神」を対照して論じている。フランスの「精神」とは「市民革命の精神」であり、それは「フランス革命において頂点に達した」とされる。⁽³⁷⁾「理性」、「啓蒙」などの諸概念も、マンはフランス的な「文明」の特質として捉えていた。そして、「文明の文士」(*Zivilisationsliterat*)の章では、兄のハインリヒ・マンを直接名指しこそしていないものの、激しく批判している。⁽³⁸⁾「戦争中の随想」で大戦を「文明」に対する「文化」の戦いとして規定し、積極的にドイツを擁護した弟トーマスに対して、兄ハインリヒは一九一五年『ゾラ論』を發表して、ゾラの生涯を例に挙げてフランスの第三共和制を称賛した。ハインリヒ・マンは、西欧的民主主義がドイツにも早く実現することを期待し、やはり直接名前を挙げることもなく暗に弟を批判したのであった。トーマス・マンは、兄のような「文明の文士」は、「民主主義的精神の代表者」であり、そのような人物は「革命の領域、革命の国を精神的故郷」とし、「本能的にドイツの『特殊性』を嫌悪し、文明の帝国との結びつきを感じている」者のことであると述べている。そし

て、こうした「文明の文士」が望む「ドイツの政治化、文学化、知性化、急進化」は、「ラテン的・政治的」な立場に立つならば「ドイツの『人間化』」のように見えるかもしれないが、真に「ドイツ的」な立場から見ると、それとは正反対で、「ドイツの『非人間化』」にほかならないとしている。⁽⁴⁰⁾

マンは「文明」を、フランスに焦点を当てて、フランス革命の「精神」に発するものとして理解していた。これは、多くの同時代人が「文明」をイギリス的なものとして捉えたのとは対照的である。これは、マンが「文明」を決して「物質的」なものではなく、「政治的」な「精神」であると考えていたことと関連している。「文明」をイギリスと結びつけて考える知識人は、「文明」は「外面的」で「物質主義的」であり、「機械的」であると考えて、イギリスの「支配」や「商人根性」と「文明」を同一視したが、マンはこのような図式を描かなかった。彼においては、〈文化〉対〈文明〉の対立は「精神」と「物質」の対立ではなく、「精神」のあり方の違い、すなわち「非政治的」な「精神」と「合理主義的」「政治的」な「精神」の違いだったのである。

それでは、フランス側では、〈文化〉と〈文明〉の対立図式はどのように考えられていたのだろうか。フランス側での、この対立図式の捉え方は、ドイツとはかなり異なった様相を見

せている。フランスの知識人が第一次大戦当時、ドイツの知識人に対する論争の中で展開した言説における際立った特徴は、「文化」という語を用いる際、《culture》と引用符を付したり、Kulturとドイツ語の原語を用いている例が多いことである。ベネトンによれば、二十世紀初頭以降一九一四年まで、フランスではKulturがcivilisationと訳されることが多くなり、cultureと訳すのはニーチェの影響を受けた哲学者を中心に少数派になっていたという。⁽⁴¹⁾ 大戦勃発後の論説でドイツ語のKulturがcivilisationと訳されず、《culture》やKulturと表記されているのは、ドイツの知識人たちが主張する「文化」が、フランスでは、ドイツに限定された特殊な考え方であると見られていたことを示している。一九一四年九月十日の *Le Matin* に掲載された「我々の敵」と題する風刺画には、「血まなぐさい偽善者、それは、鉄、火、爆撃によって、彼がドイツ文化と呼ぶものを世界に押しつけようとする者である」という文が添えられているが、これも「ドイツ文化」などというものはドイツ人が勝手に唱道しているだけであるという意識の現れであろう。詩人・小説家のアンリ・ド・レニエ（一八六四—一九三六）は、一九一五年の「『文化』の挫折」の中で、「文化 (*la Kultur*) は芸術も文学も生み出さない。それは、ドイツ人に、彼らに欠けている伝統を与えるために、彼らが持っている文明の代わりにするために創造されたものである」と

述べている。⁽⁴³⁾

レニエのようなフランスの知識人にとって、ドイツ人のいう「文化」(Kultur)とは、「文明」の代替物として創り出されたものであったし、それは「野蛮」として「文明」に置き置かれるべきものであった。「全世界」対「ドイツ」、「文明・人間性」対「ドイツ文化・野蛮」という図式で捉えられていたのである。⁽⁴⁴⁾一九一四年十月十日の *Le Temps* には無署名で、ドイツは「文化の代表者」として「文明世界」に対して「野蛮の連帯」を主張しているという記事が掲載された。〈文化〉と〈文明〉を対立図式として描くとしても、その根底には、ドイツ人が勝手に作り出した図式として距離を置いて考えるという意識があった。

フランスにおいては、「文化」(culture)、「文明」(civilisation)という語が含意する内容も、ドイツの知識人が Kultur や Zivilisation という語について理解する内容とはかなり異なっていた。「文明」という語が発せられる場合、「文明」は普遍的なものであり、個々の民族に特有のものではないが、フランスはこの普遍的な「文明」を代表し擁護しているという考え方があった。そのため、フランスの知識人は、「文明」については何の形容詞も用いずに語り、「フランス文明」や「西欧の文明」などという表現は用いていない。ジョルジュ・フォンスグリーブの「文明は全く完全な人間性に固有な性質の一

つである。文化 (la Kultur) はドイツのものである」⁽⁴⁶⁾という記述は、フランス知識人の意識を代表していると言えよう。社会学者のエミール・デュルケーム(一八五八—一九一七)が一九一五年の論説「世界に冠たるドイツ」で、「昨日まで文明民族の大家族の一員であり、そこで第一義に重要な役割を果たしてきたドイツが、こんなにまで人類文明の原理を裏切ることができるとは考えにくい」と述べながら、現在のドイツは「野蛮で良心の咎めもなく、公共の義憤を買うほど告発される存在」であると評したのも、「文明」は唯一の普遍的なものであるとする意識の現れであろう。

フランスにおいては、ドイツ人の考える「文化」(Kultur)とフランスの「文化」(culture)は異なるものだと考えられていた。しかも、ドイツにおけるのとは反対に、ドイツ人の言う「文化」は「機械的」で「非道德的」であるとさえ理解されていた。例えば、エドモン・ペリエは、「ドイツの文化 (Kultur) はフランスの文化 (culture) とは何の関係もない」と述べ、フランスの「文化」は「精神を生活のありふれたものを超えて高めること」を目指す、ドイツの「文化」は「直接的で物質的な現実から引き出される実用性」を目的とするものであり、「道德的で落ち着いた古いフランス文化の『人間性』の概念とは程遠い」としている。⁽⁴⁹⁾また、作家ロマン・ロラン(一八六六—一九四四)は一九一五年の『戦いを超えて』の中で、

フランス人はドイツの知識人たちとは大いに異なつて、精神を肉体の上に置くこと述べ、「鉄兜ドイツの物質主義」などという表現もしている⁽⁵⁰⁾。フランスの知識人たちは、ドイツで第二帝国の創設以降急速に発達した科学技術や工業に焦点を当て、その成果を戦争遂行に応用するドイツのやり方を「物質主義的」だと評したのであった。ポール・ゴルティエは「昔の乱暴者は、科学が近代人に与えたような、暴力的な破壊のための機械を使えなかつたという点で、今日の『文化人』(『civilians』)ほどには恐るるに足らなご」と述べている⁽⁵¹⁾。

ドイツの「文化」を科学技術や物質主義と結びつける考え方は、既に普仏戦争における敗北以来、フランスの知識人中に存在していた。文学者ポール・ヴァレリー(一八七一—一九四五)は、一八九七年一月に論説「ドイツの制覇」を、イギリスの『ニュー・リヴュー』誌(New Review)に発表していたが、第一次世界大戦にあたり「方法的制覇」と改題して、一九一五年に『メルキュール・ド・フランス』(Mercure de France)に再び掲載した。そこでヴァレリーは、強大な国力と軍事力を蓄積しつつあったドイツ帝国の現状を批判している。彼は、ドイツ人の気質の一大特徴として「規律」と「方法」を挙げ、ドイツ帝国が軍事的・経済的な成功を収めることができたのは「方法的管理」という「殆ど没個性的」なやり方によってであるとしている。組織内の「構成員の個人的資質は凡庸で

安定している観がある」が、ドイツの「方法」は「機械的」なものであつて、そこには「個性」を尊重する精神が欠如しているといふのである。このヴァレリーのドイツ批判は、普仏戦争でフランスがドイツに敗れた後、「敵に学べ」という意識がフランス国内に満ちていた当時としては画期的なもので、その後のフランスにおけるドイツ批判の一つのモデルとなつた。こういったドイツ批判には、近代化のマイナス面に対する人文主義的な知識人の批判が投影されていたと考えられる。

それに対して、ドイツの知識人は、ドイツの「文化」と戦争との関わりを「物質主義」という観点では捉えなかつた。それでは、ドイツの知識人は「文化」と戦争の間にどのような繋がりを見いだしたのだろうか。

3 「文化」と軍国主義

開戦後、連合国側から最も非難されたのは、ドイツの「軍国主義」であつた。ドイツの軍国主義は、帝国主義と結びつけられ、この大戦を引き起こした最大の原因であるかのようになつた。これに対し、ドイツの知識人は、自国の軍国主義を擁護する主張を展開した。

「文化世界に告ぐ」に署名したベルリン大学教授の古典文献学者、ウルリヒ・フォン・ヴィラモヴィッツ・メレンドルフ(一八四八—一九三一)は一九一四年十月十四日の「ド

イツ帝国の大学教師の宣言」の中で、「イギリスを筆頭とするドイツの敵が……ドイツの科学の精神と、彼らがプロイセン軍国主義と呼ぶものとを対立させようとしていることは、我々を憤激させる」と述べている。彼は、ドイツの軍国主義はドイツ民族の「精神」に深く根付いていると考えていた。「ドイツ軍の中には、ドイツ民族の中にある精神と別の精神は存在しない。なぜなら、両者は一つのものであり、我々はその精神に属しているからである」と述べている。⁽⁵³⁾しかし、ヴィラモウ・ヴィツツル・メレンドルフの主張には、何故ドイツの軍国主義がドイツの「文化」の精神と一体なのかという根拠が挙げられていない。

このように、軍国主義の「精神」とドイツ民族やドイツ「文化」の「精神」を一体のものとして見て、軍国主義を弁護する論調はその他にも多く見られた。軍国主義と「文化」の一体性をその理由も含めて論じている他の知識人たちの言説には、一つの共通点が見出せる。つまり、彼らは戦争と「文化」を結びつける際に、軍国主義を「精神的」なものとして捉えて、戦争遂行の科学的技術的な側面には触れることなく、軍国主義の「精神」のみを論じている点である。そこで持ち出されるのが、軍国主義を貫く「精神」は、ドイツに特有で伝統的な「文化」から発しているという議論である。

ベルリン大学教授の法学者オットー・フォン・ギールケ（一

八四一—一九二二）は、一九一四年九月十八日の講演「戦争と文化」で、ドイツの「軍国主義の精神」、すなわち厳しい訓練と古きプロイセンの伝統である粘り強さは何者にもひけをとらないものであり、今日のドイツ人があるのはこうしたもののお陰であると述べている。⁽⁵⁴⁾ここでは、「軍国主義」がドイツの伝統的な「精神」のあり方として肯定的に捉えられている。

ベルリン大学教授のドイツ文学者グスタフ・レーテ（一八五九—一九二六）は、「ドイツ文化」の本質は「軍国主義」と「学問の自由」にあると主張した。一九一五年の「ドイツ的な方法とドイツ文化について」において彼は、「軍国主義」と「学問の自由」は、外国ではあまり「道徳的・精神的価値」が認められていないが、ドイツにおいて両者は幸運にも補完しあっていると述べている。「学問の自由」は、個人の精神的自立を要求し、「軍国主義」は、大きな全体への絶対的な服従を要求する。「規律」と「自由」は「プロイセン的なもの」と「ドイツ的なもの」とも言い換えることができ、二つは素晴らしく調和している。そして、この「調和」こそがドイツの「軍国主義」の核を成している。「男らしい連帯感」を強化し、「誠実な服従」を求める軍隊は「精神の学校」であり、こういった連帯感や服従は、世代が進むにつれ軍隊の外部にも広がってドイツ民族の全体に浸透したというのである。また、外国

には見られないものとして、彼はドイツの将校養成所を挙げている。ここではドイツの学問と防衛力が結合しており、「ドイツ精神の涵養」と「ゲルマン的戦争手腕」のこうした結びつきは、「ドイツ的な方法」と「ドイツ文化」の中から有機的に成長して、今や目覚めようとしているといっているのである。⁽⁵⁵⁾

哲学者アロイス・リールは、「精神文化と戦争」の中で、戦争を三種類に分類している。第一に「文化の維持」のための戦争（Kriege, die der Erhaltung der Kultur dienen）、第二に「文化を創造する戦争」（kulturschaffende Kriege）、第三に戦争そのものが、その戦争を遂行する「民族の文化」（die Kultur des Volkes）であるような戦争である。今日の大戦はこのうち第三のものであると彼は述べている。⁽⁵⁶⁾ レーテ同様リールも、ドイツ軍を民族の教育機関と見ており、それはドイツ人の「政治的・精神的独立の防衛と維持」のために必要不可欠であるばかりでなく、それ自身が価値を持つものであると考えていた。彼によれば、そのような軍は、ドイツ文化の根本的要因を成している。そして、自由と規律、平等と服従の共存がその特色であるとしている点でも、彼の主張はレーテと共通点を持っている。⁽⁵⁷⁾

また、トレルチは、ドイツの国家創設の歴史的過程から、「文化」と軍国主義の関連を説明している。「ドイツ文化の精神」で彼は、三十年戦争によって社会的混乱や信仰の分裂、貧困、

小国分立といった事態が引き起こされたが、ドイツ民族の生命力は衰えず、それはゆっくりと新たな軍事力へと結晶し、帝国創設へと繋がっていったとしている。そして今日、軍事的組織や秩序、規律と責任の精神は、帝国統一の中心となったプロイセンはもちろん、プロイセン以外のドイツ語圏諸国も含めた国民中に行き渡っているといふ。⁽⁵⁸⁾

また、一九一四年十一月の講演「我々の国民軍」では、国民軍は国民的統一のシンボルであるとしている。彼は、プロイセン軍を構成する封建的で貴族的な将校集団と、一般大衆から成るドイツ国防軍が互いに補い合っていることを評価し、軍国主義は英仏には真似のできない「ドイツの社会状況の世界的長所」であり、漸く達成された政治的統一と国家組織に対して安全な未来を保証するためには、「最高の道徳的特質」を備えたものとして認めるべきだと述べている。⁽⁵⁹⁾ トレルチは、軍国主義という政治的・国家的なものの根底に「道徳的特質」という「精神的」なものがあると考えており、それゆえ、ドイツ軍は世界政策や帝国主義のような実利的な目的のために存在するのではないと考えていた。⁽⁶⁰⁾ トレルチにとつての軍国主義は、あくまで「道徳的」で「精神的」なものであったという点でリールやレーテと共通点を持っている。

それに対して、マイネッケの軍国主義擁護論は、他の知識人とはかなり異質である。彼は、ナポレオンの侵攻後、とり

わけ一八〇七年のプロイセンの軍制改革以降の軍国主義を取り上げてゐる。「文化、権力政治と軍国主義」で彼は、敵がフリードリヒ二世や二世の時代のプロイセン軍の持ち出しとしてドイツの軍国主義を非難するのは一面的だとしている。というのも、その頃のプロイセン軍は、厳しい規律を特色とし、貴族主義的で排他的な側面を持っていたからであり、これは「個人の自由」と「全体への帰依」を理想とする、軍制改革以降現在に至るまでのドイツ軍とは相容れないものである。何故なら、一八〇七年以降、プロイセン軍にはカントの倫理学が採り入れられ、人間の尊厳が尊重されるようになった。そして、それによって「高度な祖国愛の行為」としての軍の勤務は、カント的な「共通の倫理的義務」となったからであるという。徴兵は、当時まだ小国であったプロイセンを、「精神」を通じて、すなわち国民の全ての「道徳的エネルギー」を集めて強化するものであった。こうして、カントの倫理学は「国民軍の結合剤」となったというわけだが、カントの哲学はドイツの「精神文化」から生じたものであるから、軍国主義は「ドイツ文化」の一部であるという主張である。⁽⁶¹⁾

トーマス・マンは、ドイツが戦争を行う目的を「国民文化の合理主義的解体に対抗」するためであると考えていた。⁽⁶²⁾そして、一九一五年の「戦争に関する随想」の中で、「ドイツの将来の方向性」や「国家思想」、「文化形態」は軍国主義に属

すのであり、「文明」に属すものではないと明言している。⁽⁶³⁾「戦争中の随想」では、「市民的な共和主義」を軍国主義と対立させているが、この「共和主義」は『非政治的人間の考察』の中で西欧の「文明」に属す要素とされている。⁽⁶⁵⁾要するにマンは、ドイツの軍国主義は、「市民的共和主義」などを含む「文明」と対立するものであると見てゐる。そして、フランス人が戦争に際して弱々しく「ファルセットの声」で「文明」の叫び声を上げるのは「あまり兵士的でない」、「男性的ですらない」と非難している。⁽⁶⁶⁾

とはいえ、マンは軍国主義的な勇ましさを単に主張したわけではなかった。彼にとつては、「軍隊的」であることこそ「芸術的」であるということであった。「軍隊的」であることこそ「芸術的」であることには、「熱狂と秩序の相互作用、体系、戦略的原則、……堅固さ、正確さ、慎重さ、勇敢さ、辛苦・敗北を背負い粘り強い抵抗との闘いの中の不動、市民的生活で言うところの『安全』の軽蔑、危険で緊張感のある用心深い人生、自分自身への容赦のなさ、道徳的急進主義、専心、殉教、肉体と魂の全ての根本的な力を十分に賭けること」といった多くの共通の特質があるといふのである。⁽⁶⁷⁾芸術はマンにとつては〈文化〉の重大な要素をなすものであるから、マンも「軍国主義的」であることはドイツの〈文化〉と大いに関わりがあると考えていることになる。〈文化〉と〈文明〉の関

係を対立図式として描いたマンは、軍国主義も「文化」の一部として「文明」と対置し、「軍隊的」であることと「芸術的」であることの共通点を、イメージを羅列したモデルで説明しようとしたのであった。

これに対し、フランスにおいて、ドイツの軍国主義は最も激しく非難された。一九一四年十月にフランス道徳・政治科学アカデミーの声明にあるように、ドイツの戦争遂行は「軍国主義と文化の結合によって生まれた学問的野蠻」⁽⁶⁸⁾であるという見方が主流であった。ドイツ側の軍国主義擁護論は、このような批判的見解に対する反発を示すものだった。

レニエは、先に引用した『文化』の挫折の中で、ドイツ人たちが「文化」(Kultur)に負わせた使命について、「文化は残忍な力の福音であり、また、精神を戦争の方へと向け、戦争を準備し、戦争の存在理由やその不可避な必要性、一民族の希望を創り出すのを可能にするような、作法的な規範であった。そして現在、文化は戦争の残酷性を正当化しようと努めている」と述べている。⁽⁶⁹⁾ドイツの知識人は、新たに創り出した「文化」の概念によって野蠻な戦争遂行を正当化しようとしているのである。そして、ドイツ人たちの言う「文化」とは、伝統的な「ドイツ精神」ではなく、むしろ「彼らに欠けている伝統を与えるために」捏造されたものだと言

考えた。

哲学者で道徳・政治科学アカデミーの会長であったアンリ・ベルグソン(一八五九—一九四二)は、開戦五日後の一九一四年八月八日、「ドイツに対する戦いは、野蠻に対する文明の戦いそのものである」と宣言し、⁽⁷⁰⁾大戦中の様々な機会に「文明」を擁護する言説を展開した。彼の大戦中のドイツ軍国主義論を貫く主張は、この大戦が示しているのは「物質と道徳の対立」であり、ドイツの軍国主義には「物質」しかないというものである。この対立図式は、「文明」対「文化」の対立に関して他のフランスの知識人たちが思い描いたモデルとも共通している。

同年十一月四日の「衰える力と衰えない力」でベルグソンは、ドイツは「物質」面・「道徳」面の両方の力が衰えて負けるだろうと論じている。まず「物質」面では、フランスは全ての連合国の援軍が当てにできるし、食糧・弾薬も連合国から好きなように入手できる。しかもフランスは「人間性」(humane)のために戦っているので、「文明世界」の強力な共感が得られるが、それに対してドイツの企業はドイツの支配・ドイツの製品・ドイツの「文化」(culture allemande)にか関心を示さないので、ドイツは他国の共感を得られず、外国からの救援が得られないという。他方で彼は、「道徳的な力」は、目には見えないがいっそう重要であると主張する。プロ

イセンによって軍国主義的になったドイツは、十八世紀のフランス革命に由来する「高貴な思想」、つまり啓蒙主義の思想を拒絶し、ビスマルクは「力が法に優越する」という新たな理想を創り出した。それどころか、ドイツにおいては、力と法の区別が曖昧になり、法は征服者によって書かれ、被征服者に押しつけられるものになった。ドイツの「道徳的エネルギー」は「思い上がり」から来るものであるが、その「思い上がり」は「物質的な力」に依存した自信でしかなく、そこには「精神」が欠如しているとベルグソンは考えている。⁽⁷¹⁾彼の考え方には、フランス革命によって世界で最も早く自由と平等を達成したフランスは、〈文明〉の最先端に立っていると、いうフランス人の自意識が反映していると言える。

ドイツの軍国主義について彼は、同年十二月十二日の政治・道徳科学アカデミーの講演でも言及している。ここでベルグソンは、「文明」が進歩すると、無用の暴力を排除するために戦争の遂行に関する国際的な法規が作られるようになったが、「征服を目的とする組織」であるプロイセン軍はこの法に適応しなかったと述べている。なかでもビスマルクは「悪の天才」であり、「良心の咎めや信仰、哀れみ、魂が欠如している」というプロイセン的なあり方を体現している。そのためビスマルクは、ドイツ帝国内の、プロイセン以外の軍国主義的ではなかった諸国をプロイセン同様に軍国主義化することによ

ってプロイセンの軍国主義を更に強化することを図り、人々に「機械的服従」を要求したとされる。ここでは、プロイセン人が、「残忍性」「堅苦しさ」「規則正しさ」といった特徴を持っており、「機械的に」動く民族であると考えられている。そして、ドイツ帝国においては「征服・略奪への本能」が物質主義や産業主義と結びついて富を築いているとして、ドイツの「道徳的な力」は「物質的な力」から出た傲慢でしかない⁽⁷²⁾と非難し、ドイツの「野蠻」の本質は「科学的野蠻」「組織的野蠻」であると断定している。ドイツの知識人によって「厳しい訓練」「粘り強さ」などとして高く評価された軍国主義の特質が、ベルグソンにおいては「残忍性」や「機械的服従」を要求するものとして否定的に捉えられている。とはいえ、このように、ドイツの軍国主義に組織性を見る発想は、ベルグソンに始まったわけではなく、おそらくそこにはヴァレリーの「ドイツの制覇」などの影響も大きかったものと思われる。ヴァレリーは、ドイツ人の「規律」や「方法」こそドイツの成功の要因であると論じているが、彼は更に、それが最も容易に見出せるのは、それが「軍事的形式」を取った場合においてであると述べていた。⁽⁷³⁾

連合国の勝利が確定的になった時期の一九一八年、ベルグソンは一月二十四日にアカデミー・フランセーズ会員就任講演を行い、そこで、この大戦は、フランスが代表する「正義

の原則」に対する、ドイツが代表する「力の原則」の反逆であったと総括している。ドイツにおいては、抑圧と支配の古い理念が、「残忍なまでに組織的な精神」によって極端に達し、科学の進歩によって最大限の効果を發揮するに到った。ビスマルクは全ドイツを「一つの巨大な軍国組織」と化し、ドイツの生産力と軍事力を「全文明世界」に対する破壊的な脅威とすることを企てたのである。しかし、これに対して、「自由」と「正義」を守るために、世界は立ち上がり、勝利を収めたのであるという。

独仏双方の知識人の、軍国主義に関する言説を対照して見ると、軍国主義を肯定的に評価するか、それとも「野蠻」と見なすかの違いは、軍国主義をある「文化」の「精神」を体現するものとして捉えるかどうかという問題に関わっている。フランスの知識人たちが軍国主義を「野蠻」だと見なす場合、軍国主義は科学的・物質的な生産力や盲目的な服従に基づく組織と結びつけられており、フランス革命に遡る精神は欠けているとされる。フランス革命に遡る精神とは「文明」に属するものであり、軍国主義は「文明」と対立するという見方である。一方、ドイツの知識人はこのような批判に対し、軍国主義の軸を成すのはドイツに特有の伝統的な「精神」であると反論したのであった。

ところで、〈文化〉と〈文明〉のアンチテーゼや、軍国主義の問題に関する言説において、両国の知識人の相手に対する批判には共通点があった。それは、個性を欠いた「物質的」「機械的」なものを信奉しているとして、人文主義的な「教養」の立場にとっては都合の悪い近代の科学技術や組織に対する非難を相手の中に投影していることである。ドイツの知識人はドイツ特有の「文化」「精神」を、フランスの知識人は「文明」やフランス革命の「精神」を旗印に、自国の立場を正当化している。彼らが互いに相手に対して投げつけた「没個性的」であるとか「物質的」であるとか「精神を欠いている」などといった非難の言葉は、それぞれの民族の特質を示すというより、むしろその言葉自体が教養知識人が近代社会を批判する際に用いた常套句であった。

十九世紀後半から二十世紀初頭にかけての〈文化〉ないしは〈文明〉を軸に論争を展開した教養市民層出身の独仏の知識人は、近代社会に対する文化批判のイデオロムを用いて、相手にマイナスの要素を負わせて排除し、またそれによってプラスの要素を自分たちの〈文化〉或いは〈文明〉に付与しようとした。このようにして自分たちのアイデンティティを確立しようとしたドイツの知識人の〈文化〉概念は、その後、第一次世界大戦の敗戦を経験した後のワイマール期に政治上・芸術上の前衛を自認する知識人によって問い直されることにな

った。そして、ナチスが未曾有の犯罪行為をした後の第二次大戦後になると、アドルノの「アウシュヴィッツの後に於いて文化はゴミである」⁽⁷⁶⁾という発言に見られるように、根本的な反省を迫る知識人も現れた。しかし、ワイマール期以降における〈文化〉概念の変遷には、また稿を改めて取り組まなければならぬであろう。

注

- (1) An die Kulturwelt! Ein Aufruf. In: Thomas Anz und Michael Stark (Hg.), *Expressionismus. Manifeste und Dokumente zur deutschen Literatur 1910 – 1920*, Stuttgart 1982, S.314 – 315. 河' Jürgen von Ungern-Sternberg und Wolfgang von Ungern-Sternberg, *Der Aufruf 'An die Kulturwelt'*, Stuttgart 1996, S.144 – 147. 中村トシナルの復刻が掲載されている。
- (2) J. u. W. Ungern-Sternberg, a. a. O., S.17f.
- (3) Georg Bollenbeck, *Bildung und Kultur*, Frankfurt am Main und Leipzig 1994, S.274.
- (4) Ebd., S.81.
- (5) Jürgen von Ungern – Sternberg, Wie gibt man dem Sinnlosen einen Sinn? Zum Gebrauch der Begriffe 'deutsche Kultur' und 'Militarismus' im Herbst 1914. In: Wolfgang J. Mommsen (Hg.),

Kultur und Krieg: Die Rolle der Intellektuellen, Künstler und Schriftsteller im Ersten Weltkrieg, A München 1996, S.89f, S.94.

(6) J. u. W. Ungern-Sternberg, a. a. O., S.161f.

(7) Philippe Beneton, *Histoire de mots: culture et civilisation*, Paris 1975, p.80.

(8) Alois Riehl, Die geistige Kultur und der Krieg. In: Jakob Wychgram (Hg.), *Deutscher Krieg und deutscher Geist*, Bielefeld und Leipzig 1916, S.19.

(9) Karl Joel, Neue Weltkultur, Leipzig 1915, S.78, 82, 5, 7. Zit. Michael Pflaum, Die Kultur- Zivilisations-Antithese im Deutschen.

In: Das Sprachwissenschaftliche Colloquium (Hg.), *Euro- päische Schlüsselwörter*. Band III, *Kultur und Zivilisation*, München 1967, S.331f.

(10) Ernst Troeltsch, Der Geist der deutschen Kultur. In: *Deutschland und der Weltkrieg*, Leipzig und Berlin 1915, S.59.

(11) Ebd., S.62.

(12) ders., Die Idee von 1914. In: ders., *Deutscher Geist und Westeuropa*, Berlin 1966, S.54. エルンスト・トレルチ (西村貞一訳)「一九一四年の思想」(『ライプツ精神と西欧』筑摩書房、一九七〇年所収) 五六一–五七頁。

(13) ders., Über einige Eigentümlichkeiten der angelsächsischen Zivilisation. In: *Deutscher Geist und Westeuropa*, Berlin 1966, S.111. 「ハンタロサタン文明の二」「三の特色」(前掲書) 一

- 1915/1916, S. 507. Zit. Pflaum, a.a.O., S. 334.
- (14) Ebd., S. 109, 114f. 前掲書' 一一一一一三頁' 一一八一—一九頁。
- (15) ders., Der Geist der deutschen Kultur, S. 80. 一九一六年の「ドイツ文化の形而上学的宗教精神」にも全く同じ文章がある。ders., Der metaphysische und religiöse Geist der deutschen Kultur. In: a. O., S. 66. 前掲書' 六九頁。
- (16) ders., Der Geist der deutschen Kultur, S. 90. Der metaphysische und religiöse Geist, S. 79. 前掲書' 八二頁。
- (17) ders., Der Geist der deutschen Kultur, S. 58f.
- (18) Friedrich Meinecke, Kultur, Machtpolitik und Militarismus. In: *Deutschland und der Weltkrieg*, S. 624.
- (19) ders., Politik und Kultur. In: *Werke: Politische Schriften und Reden*, Darmstadt 1958, S. 77.
- (20) ders., Nationalismus und nationale Idee. In: a. a. O., S. 94.
- (21) ders., Deutschland und die kleinen germanischen Nationen. In: a. a. O., S. 127.
- (22) ders., Politik und Kultur, S. 80.
- (23) Max Scheler, Der Genius des Krieges und der Deutsche Krieg. In: ders., *Gesammelte Werke*, Bd. 4, Bern und München 1982, S. 44f.
- (24) Ebd., S. 50.
- (25) Otto Schmidt-Gibichentals, Die Technik der Suggestion im Volkleben. In: *Politisch-anthropologische Monatsschrift*, 14, 1915/1916, S. 507. Zit. Pflaum, a.a.O., S. 334.
- (26) ders., *Der Krieg als Kulturfaktor als Schöpfer und Erhalter der Staaten*, Berlin 1916, S. 8. Zit. Pflaum, a.a.O., S. 334f.
- (27) Houston Stewart Chamberlain, *Briefe*, München 1928, Bd. II, S. 252. Zit. Pflaum, a.a.O., S. 335.
- (28) Thomas Mann, Gedanken im Kriege. In: *Gesammelte Werke*, Band XIII, Frankfurt am Main 1974, S. 528.
- (29) Ebd., S. 529.
- (30) Ebd., S. 537.
- (31) ders., *Betrachtungen eines Unpolitischen*. In: *Gesammelte Werke*, Band XII, Frankfurt am Main 1960, S. 169. トーマス・マン(森川俊夫他訳)「非政治的人間の考察」(『トーマス・マン全集XI』新潮社' 一九七二年)' 一三九—一四〇頁。
- (32) Ebd., S. 31. 前掲書' 二七頁。
- (33) ders., *Betrachtungen*, S. 49ff. 前掲書' 四二頁。
- (34) Ebd., S. 52. 前掲書' 四二—四三頁。
- (35) Ebd., S. 51. 前掲書' 四二頁。
- (36) ders., *Gedanken im Kriege*, S. 31.
- (37) Ebd., S. 51. 前掲書' 四二頁。
- (38) Ebd., S. 53ff. 前掲書' 四四—五六頁。
- (39) Heinrich Mann, Zola. In: ders., *Geist und Tat*, Berlin und Düsseldorf 1960, S. 150ff. ノーナンリコ・マン(小栗浩訳)「マン」(『歴史と文学』晶文社' 一九七一年) 一三二—一三三頁。

- (40) Th. Mann, *Betrachtungen*, S.68. 邦訳『51五六頁。』
- (41) Bénéton, op. cit., p.80
- (42) Georg Huber, *Die französische Propaganda im Weltkrieg gegen Deutschland 1914 bis 1918*, München 1928, S.104.
- (43) Henri de Régnier, *La famille de la «Kultur»*. In: *Mercure de France*, 1.4. 1915, p.662.
- (44) Huber, a.a.O., S.200.
- (45) Bénéton, op. cit., p.87.
- (46) Georges Fonsegrive, *Kultur et civilisation, Pages actuelles, 1914 - 1916*, Paris 1916, p.34. Cit. Bénéton, op. cit., p.87.
- (47) Emil Dulkeim, *L'Allemagne au-dessus de tout: La mentalité allemande et la guerre*, 1915. エッセル・ヴォルケーム (小関藤一郎訳)「世界に冠たるドイツ人達の精神構造と戦争」(小関藤一郎・山下雅之訳『デュルケーム ドイツ論集』行路社、一九九三年)ノ二一九—二二〇頁。
- (48) Edmond Perrier, *France et Allemagne*, Paris 1915, p.159.
- (49) *Ibid.*, pp.161 - 162.
- (50) Romain Rolland, *Au-dessus de la Mêlée*, Paris 1815, p.10, p.23. ロマン・ロラン (宮本正清訳)「闘いを超えて」(『ロマン・ロラン全集 18 エセー』みすず書房、一九八二年)ノ一四頁—二二頁。
- (51) Paul Gautier, *Les origines de la barbarie allemande*. In: *Revue des deux mondes*, 1.7.1915, p.113. この場合「ドイツの野蛮」が問題となつてゐるテキストであるし、civilisé という語が使われているが、引用符が付いており、また、二十世紀初頭のフランスでは culture という語の形容詞形 culturel という語はそれほど一般的には用ゐられなかつたので、この civilisé は「文化人」(Kulturmensch) の意で用ゐられてゐると解釈して良いと思われぬ。
- (52) Paul Valéry, *La conquête allemande*. In: *Mercure de France*, 1.9. 1915, p.55, 60, 62. エッセル・ヴォルケーム (佐藤正彰訳)「方法的制覇(独逸の制覇)」(『ヴァレリー全集II 文明批評』筑摩書房、一九六七年)ノ九頁、一六頁、一八頁。
- (53) Ulrich von Wilamowitz-Moellendorf, *Erklärung der Hochschullehrer des Deutschen Reichs*. In: *Reden aus der Kriegszeit*, Berlin 1915, S.85. Zit. J. u. W. Ungern-Stenberg, a.a.O., S.58.
- (54) Otto von Gierke, *Krieg und Kultur*. In: *Deutsche Reden in schwerer Zeit*, Berlin, 1914, S.95.
- (55) Gustav Roethe, *Von deutscher Art und Kultur*. In: *Deutscher Krieg und deutscher Geist*, Bielefeld und Leipzig 1916, S.65f.
- (56) Riehl, a.a.O., S.19f.
- (57) *Ebd.*, S.26f.
- (58) Troeltsch, *Der Geist der deutschen Kultur*, S.67f.
- (59) ders., *Unser Volksheer*, Heidelberg 1914, S.13, 17. 竹本秀彦『ヘルンスト・トレルチと歴史的世界』行路社、一九八九年、一九六—一九七頁より引用。

- (60) Ebd., S.18. 前掲書、一九七頁。
- (61) Meinecke, Kultur, Machtpolitik und Militarismus, S.639.
- (62) Th. Mann, *Betrachtungen*, S.116. 邦訳、九五頁。
- (63) ders., Gedanken zum Kriege. In: *Gesammelte Werke*, Band XIII, Frankfurt am Main 1974, S.555.
- (64) ders., Gedanken im Kriege, S.540.
- (65) ders., *Betrachtungen*, S.232. 邦訳、一九一―一九二頁。
- (66) ders., Gedanken im Kriege, S.541.
- (67) Ebd., S.530.
- (68) Jorg Fisch, Zivilisation, Kultur. In: Otto Brunner, Werner Conze, Reinhart Koselleck (Hg.), *Geschichtliche Grundbegriffe*. Band 7, Stuttgart 1992, S.766.
- (69) Régier, op. cit., p.662.
- (70) Henri Bergson, Discours prononcé à l'Académie des Sciences Morales et Politiques. In: Id., *Mélanges* Paris, 1972, p.1102.
- (71) Id., La force qui s'use et celle qui ne s'use pas. In: Ibid., pp.1105 - 1106.
- (72) Id., Discours en séance publique de l'Académie des Sciences Morales et Politiques. In: Ibid., pp.1107 - 1108, 1114.
- (73) Valéry, op. cit., p.56. 邦訳、一〇頁。
- (74) Bergson, Discours de réception à l'Académie française. In: Id., op. cit., pp.1288 - 1289. アンリ・ベルグソン (樹下栄一郎訳)「アカデミー・フランセーズ会員就任講演」(『ベルグソン全集 第九卷』白水社、一九六五年)、二二二―二二五頁。
- (75) Theodor W. Adorno, *Negative Dialektik* (stw. 113), Frankfurt am Main 1975, S.359. テオドール・W・アドルノ (木田元・徳永恂・渡辺祐邦・三島憲一・須田朗・宮武昭訳)『否定弁証法』作品社、一九九六年、四四七頁。